

1. 登山記録

海外の登山

1998-99中日科学合同可可西里学術考察取材隊
東カンツアーリ峰 (6,167m) 登山隊報告

増山 茂

登山概要

Expedition name : 1998-99中日科学合同可可西里学術考察取材隊東カンツアーリ峰 (6,167m)

登山隊

Mountain Range : チベット-青海高原 (ココシリ高原) にある独立峰

Country : 中国

Mountain : 東カンツアーリ峰

height : 6,167m

attempt Route : 南東稜から南峰を経て頂上へ

advanced camps : C1 (5,650m)

oxygen : なし

fixed rope : なし

estimated standard of difficulty :

period : 1998/12/27-1999/1/22

If successful,

number of summitter, 4

names of summit party and date : 主峰, 増山茂, 村口徳行, 山主文彦, 広島大樹(1999/1/13)
南峰, 山田和也, 金沢裕司(1999/1/13)

If unsuccessful,

Major accidents : 凍傷 (両手, 2-5DIP関節以遠)

If lost, names of the victims, cause, height and date :

special note : 東カンツアーリ峰 (6,167m) 初登頂

Party Nationality : 日本

Party Members : 11

size : 男性10, 女性1

Leaders : 増山茂(50)

Members : 山田和也(44); 取材隊隊長, 村口徳行(42); 登攀隊長, マルムト・ハリク(39),
伊藤滋(38), 金沢裕司(32), 山主文彦(37), 広島大樹(27), 増田祐子(29)

通訳, 大泰司紀之(58), 黄榮福(58)

Assistings: 連絡官: 呉健勝, 許世文

Reference: 青く透明な大地 可可西里。テレビ東京放映予定

Published report: in press

Corresponding to:

Name: 増山茂

address: 千葉市稲毛区黒砂2-1-5

tel: +81-43-246-5171

fax: +81-43-246-5171

e-mail: masuyama@med.m.chiba-u.ac.jp

web site:

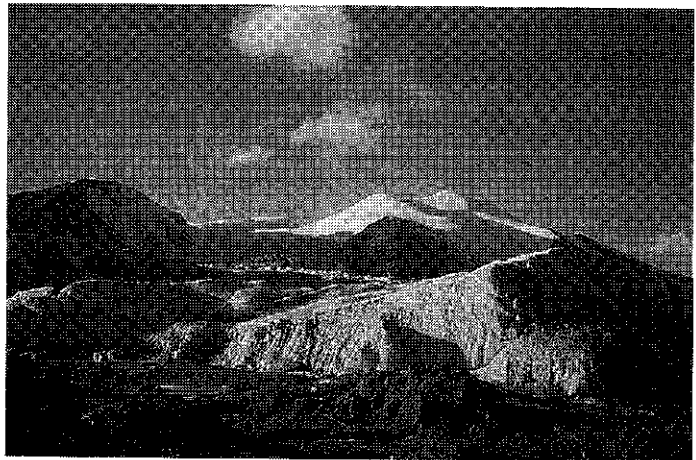
2. 1998-99中日科学合同可可西里学術考察取材隊東カンツアール峰(6,167m)登山隊報告

1999年1月13日10:00am, 東カンツアール峰登山隊第一次アタック隊4名(増山, 村口, 山主, 広島)は頂上に到達した。マイナス30℃の寒さ, 15~20m/秒の強風についての苦闘の末の登頂であった。

高原の強盗団と恐れられたカムや世界最高所でヤクや羊を追う遊牧民がランドマークとして眺め暮らし, ヘディンが100年前チベット潜入の際に既にこの山にコメントをなしてきたとはいえ, このチベット-青海高原の最奥部可可西里(ここしり)高原に私どもは小さな窓を開けたことになる。

東カンツアール峰の頂上からは, 東に新青峰の峰峰が, 西にはヘディンが可可西里の灯台とよんだ秀麗な双耳峰西カンツアールが独立した雄姿をみせる。北には新疆との境をなすコンロン山々が連なり, 南には冬のマイナス30℃にも凍らず赤茶けた波を打ち寄せるシジンウランホの湖面が輝く。このココシリ全体をここから眺めると, ヒマラヤの峰峰の峻険さとも異なり極地にみる大きな氷河の力で侵食された大地とも違って, いわば地球の原初的環境とはかくもかと奇妙な安心感を覚える。

東カンツアール峰はたかだか高度6,167mにすぎない。周りの大地は4,800~5,000mもあって, 登山としては大したものではない。しかしここ東カンツアール峰に登山を目的にやってきたのはほとんどいない。まして, 厳冬期にこの凍った大地に足を踏み入

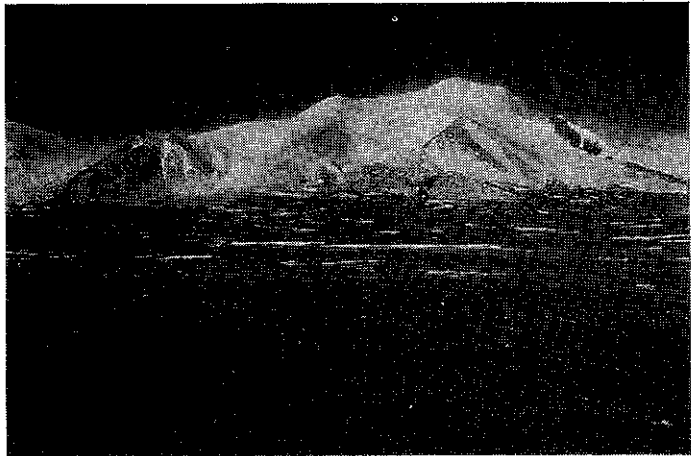


東カンツアール峰: 関東河水河末端より見る

1. 登山記録

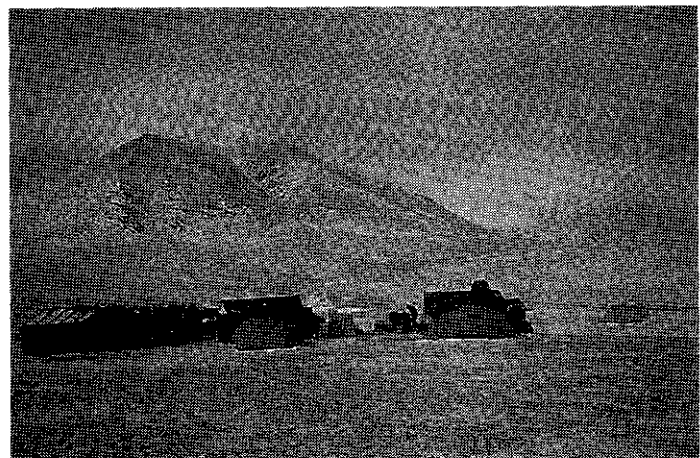
れるもの好きがいるはずもない。登山のための資料など、どこを訪ねても得られない。ヘディンが唯一の教科書??

この山に初めて目を付けたのは山田である。この秘境コソシリを映像に残そうとする企画を進めている山田はヘディン伝説をもつ未踏峰をここに“発見”したのである。昨年(1998年)、山田は北面氷河上を偵察する。しかし、今になってわかったことではあるのだが、北面からは氷河と山稜を10kmも辿らねばならぬのである。この



東カンツァーリ峰を東側面より

ときの写真が数葉あるが、かなり手前で撮ったものらしくピーク周辺ははっきりしない。これは、今回は距離が短くなる東面か南面からのアプローチを考えている我々にとって残念ながら役に立つ資料とはいえない。九州大学の調査隊がここをトレースしたぶん北からと思われる写真を残しているのだが、とても我々が目にする山と同一のものとは思えないほどであった。1991年の中国の科学調査隊の撮った写真も2枚ある。しかし、実のところこの2枚がどの方向から撮られたものか、いやこの山が本当に東カンツァーリ峰であるのかどうか、について日本では決着がつかなかったのだ。資料がまるでないというのは面白いもので、山を眺めただけで、この氷河のアイスフォール帯を抜けようじゃないか、この稜線が安全だ、この雪壁が美しい、とどの隊員にも意見を言う権利が与えられるのである。50年前のヒマラヤ登山もかくやという夜のディスカッションであった。



ベースキャンプ：東カンツァーリ峰に南麓に建設

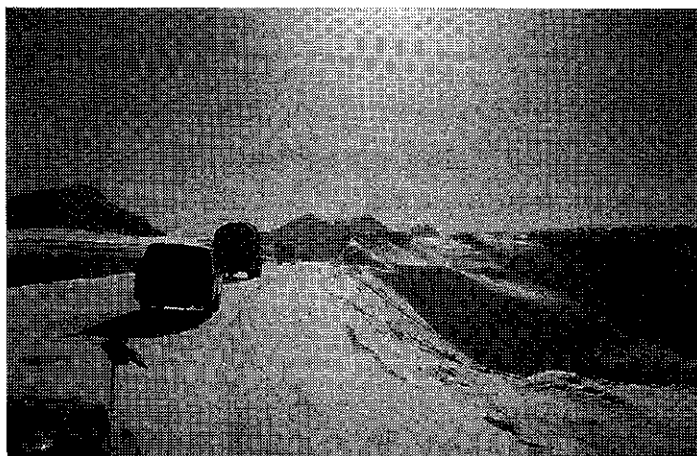
1999年1月6日、ゴルムド(2,800m)を出発後4日目にしてようやく東カンツァーリ峰南面のBC予定地(5,200m)に到着。4台のジープやランドクルーザー、2台の大型トラックによるかなりタフな行程であった。

ココシリはとてつもなく寒い。みんなエベレスト最終キャンプにいるような格好をしているのだが、それでも寒い。また乾いた強風が細かい砂を車の中に吹き寄せさせるため、空咳が止まらなく、無惨なマスク姿の者も多い。しかしここは野生動物の楽園。厳冬の季節ではあるが、チベットガゼル・チルルー・チベットノロバ・ワイルドヤク・そしてこれらを狙う狼などの群が目を楽しませてくれる。

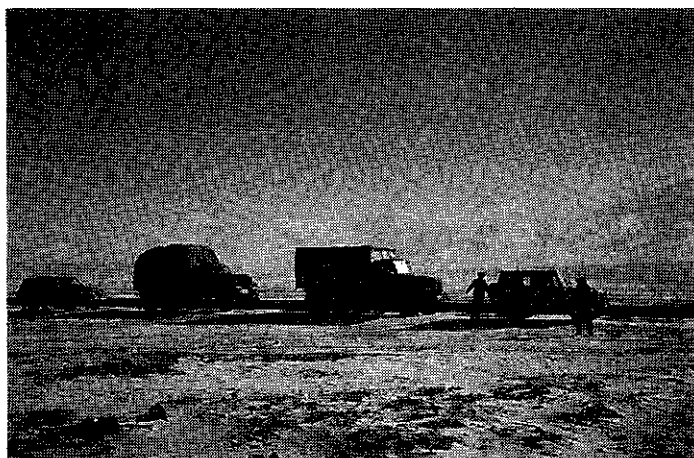
さて、学術考察隊は明日からは登山隊に衣がえである。

1月7日、マイナス28℃、晴れ。氷河ルートの偵察（増山，村口，広島）。東カンツアール峰はこの程度の標高の山にしては長大な南峰から流れ下る7kmほどの氷河を持っている。厳冬期でもあり氷河は安定していると思える。右岸沿いにこの関東河氷河のアイスフォール帯を抜けて南稜に達するルートが可能であるようであった。青い氷が美しい。

1月8日、マイナス30℃、晴れ、強風。関東河氷河をトラバースし南東稜に取り付く可能性の検討を行う（増山，村口，村主，広島）。しかし、可能ではあるが時間がかかると考えられた。次に、南東稜のコルに北側の雪壁より取り付いてみる。シジンウラホの湖岸からみたときにとっても美しく見えた壁である。雪崩の危険を心配していたのだが大丈夫そうである。腰までクレバスにはまった者もいたが、赤布でマークする。このコルは一部岩稜が露出するほど風が強く通り抜けるところなのだが、その陰にうまく風を避けられるテントサイトを発見する。このコルからは関東河氷河の上部が詳しく観察できたが、下からアイスフォール帯を抜けても南稜に到達するためには多くのクレバスが避けられないことが判明。難しい。



キャラバン：雪の青蔵公路を行く



キャラバン：雪のココシリ

1. 登山記録

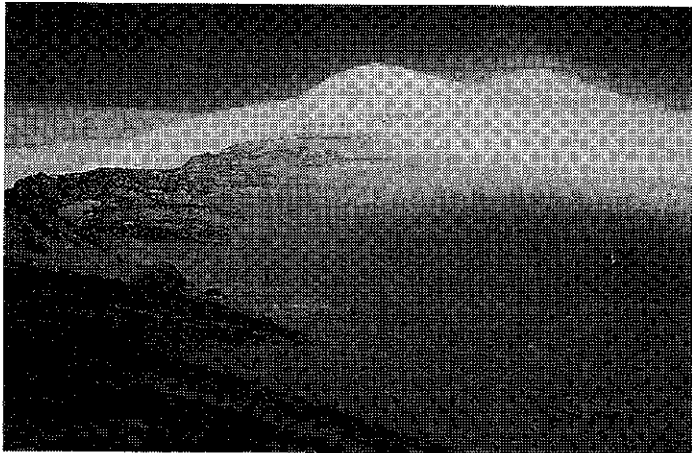
1月9日、マイナス29℃、雪。5cmくらい積もって全ては雪化粧。日中でもマイナス20℃以上にあがらない。南峰より真南に落ちる氷河、関東河氷河の遡行、関東河氷河のトラバースの可能性をもう一度再検討。いろいろな意見もだが、最終的には南東稜のコルに北側の雪壁から迫りここに前進キャンプ(5,600m)を設け、南東稜から南峰を経て頂上へという平凡だけど一番安全なルートを選ぶことに決定。新雪に注意が必要。

あとで思えばこれが正解であった。これ以上長いルートは今回の隊の能力を超えることになったであろう。

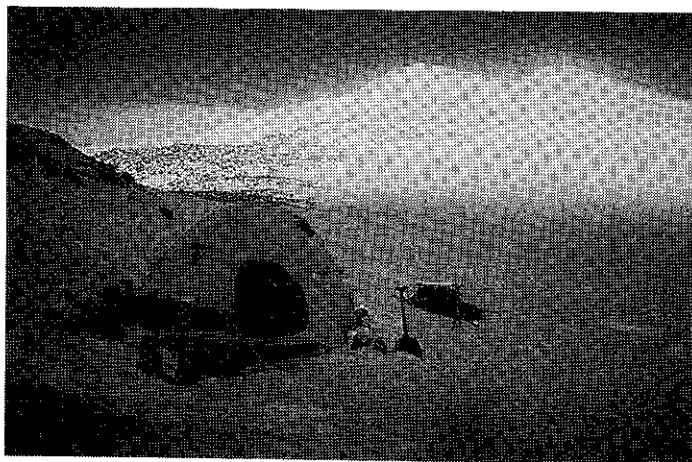
1月10日、マイナス31℃、雪、その後晴れ。風弱し。増山、村口、山主、広島、山田、金沢で前進キャンプまで荷上げしてデポ。必要な物は全て上げる。伊藤は調子が万全ではなくBCに留まっている。雪は落ちてきている。今日は風も弱い。

偵察によれば技術上の大きな問題はなさそうであったが、スノーバー4本、アイスクリュウ4本、フィックスロープ100m、メインロープ2本を携行することにした。

問題は寒さと風であると考えられた。BCでも朝にはマイナス30℃を割り込み昼間でもマイナス20℃以上にはならない。頂上ではマイナス40℃も考えられる。しかし、もっと問題になるのは風である。東カンツァーリ峰は可可西里の高地平原に聳える単独峰であるため太陽が上がってくると強烈な風が襲いかかる。日中(11:00すぎから18:00ごろまで)は強風が避けられないことは偵察の結果明らかであった。11時前には頂上に到達し安全地帯まで降りていたいものだ。朝の寒冷は厳しいがこれには目をつぶって、未明の出発とする必要がある。



南東稜から頂上を望む



C1から頂上

1. 登山記録

1月11日、マイナス28℃、晴れ。BCにて休養。

1月12日、マイナス24℃、晴れ。C1へ向けて出発（増山、村口、山主、広島、山田、金沢）。暖かく感じる。風も弱い。新青峰が美しい。順調にC1入り。ダンロップ4人用2張りを張る。村口、山主は南峰下部まで偵察にでる。雪は安定している、とのこと。ただし、風は強く、寒い。

1月13日、マイナス28℃、晴れ。

6:00、第一次アタック隊C1出発（増山、村口、山主、広島）。（北京時間をとっている中国ではこの西域では夜明けは9:00頃となる。）これなら強風に捕まる前に頂上を立てるはずだ。満点の星、薄い三日月がかかっている。風は予想通り弱い。マイナス28℃。暖かく感じるほどだ。幸先よし。



C1への急登

南峰までは広い尾根の上りである。氷の上にクランポンがよく効くクラストした雪がついている。

ただ吹きだまりに足を踏み込むとくるぶしまで足を取られとたんに苦勞する。ほぼ闇夜、ヘッドランプだけでは楽なルートを見出すのが難しく時間を取られる。南峰直下あたりから風が出てくる。まだ明けもしないのに！いつもと違って風が舞っているようだ。当初西（左側）から当たっていた風が南峰あたりから右の頬を打つようになる。気温も下がってきたような気がする。鼻部、頬部の軽い凍傷は避けられないか。こころなしか暁の空には笠雲のような雲が浮いているように見える。

南峰直下には偵察で確認していたようにクレバスが何本か入っている。注意して通過する。南峰8:00着（増山、山主）。村口、広島は撮影の関係もあり先行している。帰路南峰での下降点を間違えないようにマーキングする。

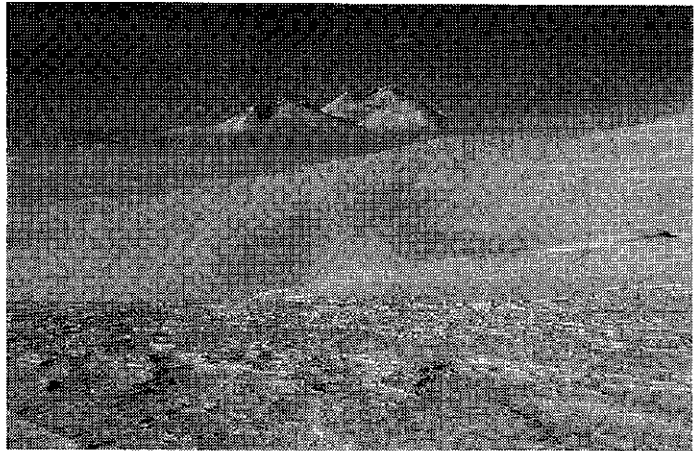


頂上にて

南峰—主峰の稜線で風はさらに強くなる。突風に体が浮き上がる。顔面や手指の感覚がおかしくなる。先行する2人は見えない。ただた

だ前進する。頂上下の雪壁の急登部で村口、広島が降りてくる。先行した2人だが頂上の寒さに耐え切れなかったようだ。ビデオカメラのバッテリーを求めてでもある。特に広島の体は冷え切っているようである、やや反応が鈍い。そのまま下山、安全なところまで下るように指示する。残りの3人で頂上へと雪壁を登る。

10:00, 20m/秒の烈風が吹き荒れる頂上に冷え切って到着。胸に抱いて暖めておいたのだが私のスチールカメラは作動しない。村口のプロ用ビデオカメラはさすがに動いており、東に新青峰の峰々を、西には秀麗な双耳峰西カンツアーリを、北には崑崙の山々をなめてゆく。南には輝くツジシウランホの湖面を刻み込んだココシリ平原が広がっている。ゆっくり眺



頂上よりカンツアーリ峰を望む

望を楽しみ妄想をたくましくする間もなく凍えた体は下山を促す。ほうほうの態で下る。ところが、いつもとは違って、午後になると風は落ち着いてくる。なんたることだ。

C1帰着13:30。寒冷と強風は広島の計8本の指を犯した。C1で診てみると両側第2から第5指までDIP関節以遠が凍り付き変色している。即座に温浴をおこなう。同日中に広島はBCへ下山させることとする。増山が付き添って降りる。

凍傷について、今回の隊はインマルサット電話とパソコンを携帯していた。BCに帰った増山は緊急措置を行うとともに、日本の金田正樹医師に現場で可能な措置をe-mailで問い合わせた。金田医師は即座に反応、的確な指示を与えてくれた。また凍傷を負った隊員は予定を早めて日本へ戻らせることにした。成田空港から金田医師の病院に直行した隊員の指は治療よろしきを得て切断を免れそうである。



隊員

1月14日、第二次アタック隊の山田、金沢は11:00、6,090mの南峰まで到着。しかし強風のため以降の行動を打ち切る。伊藤C1に入る。山田、金沢、伊藤、村口、山主でC1を撤収、BCへと下りる。

さらば東カンツアーリ峰。次あなたに会いに来るのはだれだろうか。

(登山隊隊長)